

## 真本英行（文）

教師は参加者に、安心安全、信頼（参加への尊重）、他人を尊重し・違いを認める雰囲気作り、可能性を探ることを支え・励ます基盤、参加者を自発的に導き、楽しませ、洞察力を強化し、予想外のことにさえ喜びを得る環境を作ります。

たとえ、参加者が未知のことが奇妙に思っても、既知のものと橋架けして、想像と革新を与えます。

言葉や行動で表出し、それらは、参加者に影響を与え、反応表出していきます。それゆえ教師の姿勢は、学習にとって重要。

参加者への大きな信頼は、学習や学習がすでにあるものを見つける本人の作業であり、教師はファシリテーターです。

まさに、参加者が参加者のもつ何かを発見するガイドといえるでしょう。

教師は参加者に、学習の場所にいることに意味を持たせます。参加にワークの体験を通じてコミットメントしてもらおうのです。

教師は、大きな目的に向けての方向性の設定、そして学習全体をデザインします。

何かを学ぶことを、参加者が最初は難しく感じるかもしれない。しかし、そのうち身につくものです。

学ぶとは、自然なプロセスであり、大きな可能性への旅であり、楽しいものなのです。

教師は、その概念を教え、未来の可能性を一緒に見て、学びに方向性をしめすガイドをします。

## 真本英行（文）

学びは、教師からだけでなく、参加者自身が得るものであり、他の参加者やグループからも得られます。それらは、学びの相乗効果を生み出します。

そして、教師自身も、常に提供中の学習からいろいろ学ぶことができます。

学びとは、色々なレベルで、別々に起こる現象であり、一度に全てを学ぶというのは、プレッシャーになるだけで無意味です。体験と分析は同時にはできない。

それは別々のプロセスです。

学習はその別々のプロセスを満たすようにデザインされています。

教師は参加者の学びを促進する為、参加者の状態を抽出します。

それは、教師からの質問、参加者の体験のシェア、プレゼンなどを学習に組み込むことで達成されます。

状態を抽出することは、学びの方向性を見つけるために重要です。

方向性を示すために枠組み設定することは、学びを深いものにします。  
人は、目的という大きな状況の中で、物事を深いレベルで理解するからです。

参加者自身が、学習の枠組み設定を各自ですることによって、深いコミットメントが得られます。

学習にも、スタートから そのような機会を設けておきます。

## 真本英行（文）

枠組み設定とは、状態へ参加者をアクセスさせ、体験を組織化する為の焦点を絞る作業でもあります。

参加者が望む方向性に向けて学びが理解されるようにしています。

参加者が深い学びを得るための最後の理解に向けて、復習・振り返り、反応表出、タイムブリッジを学習の中に組み込みます。

また、体験や学びがループするようにもデザインするのです。

それは、学習が繰り返しの効果、抽象度UP、詳細化・具体化を繰り返し多種の経験からの視点を生む為のつながりを重視するからです。

反応表出を繰り返すことや、既知と未知を結びつけるガイドをすることで、深い記憶への定着を促進します。

教師は参加者に、その目的や状況に適した質問を学習に組み込みます。

なぜなら、参加者は自分が行っていることが何かを検索することでも、学んでいるからです。

つまり、自分の今の状態やいままでの体験、もっている概念、これから起こることに意識が向き、関連付けられて、記憶が強化されます。

個々の体験、深い学びに影響します。

そのように学習は、重なり合う部分を含む復習・振り返りの場が用意されています。

## 真本英行（文）

振り返りは早い時間の方が、効果的。しるしをつけ、適時ふりかえるようなデザインをします。

また、反復は多ければ多いほど、学びは強化されます。  
学習中は、形を変えて、反復の期間を多く盛り込んでおきます。

人がものを学ぶことにおいて、反応表出は重要な役割を果たします。  
教師は、参加者からの反応表出なしには学習を効果的なものにはできません。

反応表出は、学びを進歩させ、積み上げていくうえでの確認作業なのです。  
もちろん、ラポールを取るための手段でもあります。

- ・ 反応表出を得ることで、個々の学びの関連性を伝えられ
- ・ 反応表出から、学習の意味づけ、目的を設定することができ
- ・ 反応表出で、参加者は変化の意味・価値がどのような役割なのかを知ることができます。

「変化というのはどのようなことを意味するのか？」

「変化をしていくとき、人は何をしているのか？」

「何の目的の為に変化をしているのか？」

これらの質問の答えそのものが、学習で提供していくことなのです。  
学習は、参加者が変化の目的や意味を知り、変化のプロセスを体験する場です。

変化の持つ大きな目標、意味を知ってもらう為に、教師は、学習中に、未来志向を使います。

## 真本英行（文）

教師は、常に、以下のことに焦点をあて、学習をデザインします。

- ・変化を起こしている人は、どんな行動を取っているのでしょうか？
- ・変化のプロセスは？変化の目的や価値とは何でしょうか？

学習中も参加者にこの質問を投げかけます。

教師は参加者の学習を深めるために、学習中に起こる【変化の目的、価値】を参加者に意識させることが大きな役割です。

そして、参加者に学習を通じて【変化のプロセス】を実際に体験してもらいます。

適時、変化の状態を教師の質問によって、抽出する作業も必要です。

そうです。学習は、参加者の変化に向けて、デザインされているのです。

変化に向けて参加者がどのような状態なのか？それを適時知ることによって、参加者の望む方向へガイドすることができます。

変化の目的・価値を知ることはなぜ重要なのでしょうか？

それは、変化の目的を持たなければ、体験が強化されないため、学びは深くないからです。

教師は変化の目的を参加者に未来志向で導き、アフメーションさせることで、学習の効果を高めます。

そして、目的を念頭に置いて学習をスタートさせます。

## 真本英行（文）

人が、変化を起こすプロセスで教師が提供する工夫点は、

- ・非言語からの言語化の過程を体験してもらい
  - ・左脳、右脳の昨日を両方刺激する作業を入れ
  - ・認知・視点の変化を促す行動を取ってもらう
  - ・感覚をたくさん使い、複合的なコード化を狙う
- そういったことをワークに組み込むことです

とにかく、脳への刺激は多方面からたくさんあればあるほど、学習効果があがります。

過去に名詞化された観念を出し合うグループ発表も有効です。

それは個人個人が違った一般化されたものが表面化している状態です。

人は、他者と影響せずにはいられない生き物です。

他人の概念と対立、比較、関連付けすることで、中立的な道を、新たにつくるようになります。

参加者が、そういった経験。連想、関連を作れる数が多いほど、早く学べます。

そこでは、焦点の拡大、シェア、連結が行われています。

教師は、それを意図して、グループ発表、あるいは形成されている概念を、適時抽象度UP、詳細化・具体化する機会や質問を参加者に投げかけます。

人は、多重レベルでの影響を受けますから、情報をさまざまなレベルで抽象度変更することで、可能性が広がります。

もちろん、今までの体験も再認識化していきます。

## 真本英行（文）

人は、自らの体験を配列して、「ふるまい」を「理屈づけ」してきています。  
その体験の配列を組みなおすことが、新たらしい成果へと今の橋を架けることです。

教師が参加者に新しい概念を教えるとき重要な既知と未知をつなげる作業でもあります。

このように参加者は、学習を通じて再認識化し、パラダイムシフトを起こします。

その体験が堅固なものになり、定着することを知っていれば、教師として、「新たな観念」  
「観念の変化」をガイドすることができるということです。

そして、ガイドの結果、参加者の「ふるまい」が変化したり、「ふるまい」の意味が変化することで、参加者のその後の行動が変わるのです。

その行動の変化が、参加者の人生にとって、意味のあるものであれば、素晴らしい体験を提供したといえるでしょう。

それらの変化は、非常に強力な納得体験によって起こります。  
納得体験は、教師が提供するワークやメタファーなどです。

教師は、言語体系を使い、枠組み変更、再認識化をすることで、参加者の「潜在的な制限」にも対応ができるのです。

「言葉」はものすごい力を持っています。  
私達は、毎瞬毎瞬入ってくる言語に影響されているのです。

学習中に使う教師の言葉は、参加者に大きな影響を与えます。

## 真本英行（文）

教師は、せっかく参加者がパラダイムシフトしたことを台無しにしないためにも、以下のことに気をつけて参加者に話をします。

実体験には否定形は存在しないことを知り、言葉使いに気をつける。

否定は、一度のその状態を思い描いてから、削除する過程をたどるので、思い描いたことは、実体験に影響を及ぼします。

脳は、体験の近いものから焦点化する性質があります。

そのために、長い期間をかけてパラダイムシフトしたものに、

「もう、〇〇しないでください」という言葉かけをしてはいけないうでください。

なぜなら、〇〇した状態を思い描き、遠い過去の体験を反応表出するまえに、その近い体験を反応表出するからです。

そうなれば、長い期間をかけてパラダイムシフトが、元に戻される可能性が大きいのです。

脳内での再生体験は、自分の体験という世界を理解する、あるいは、意味を与えるプロセスです。

そこに至る前段階の実体験は、非常に曖昧です。

そのため、実体験のしるしリングは自由に行えます。

つまり、教師は、参加者へ枠組み設定や再枠組み設定をすることで、理解や意味づけを導くことができます。



## 真本英行（文）

人は名詞化したものに焦点が当たり判断を下します。  
その焦点化は、人それぞれの概念が影響しています。  
何に焦点化するかは、その人がもつ概念によるということです。

まずは、それを知り、尊重すること。  
そして、教師は枠組み設定により焦点が変化することを知れば、複数の焦点の可能性を示すことができるのです。

教師はラベル付けの可能性の広がりを示し、意味づけの変更を促すこともできます。  
経験の意味づけを変更することにより、人の行動も変化します。

参加者に、望む方向へ変化をガイドできるのも教師なのです。

参加者の思考と行動を柔軟性、創造性、可能性のあるものにするために、抽象度UP、詳細化・具体化、水平チャンクを利用します。

個人の体験、小グループの体験、大グループの体験、プレゼンテーションの準備で起こる要約の作業、発表による反応表出、それらさまざまな体験を通じて学びを深めます。

それは、体験を理解するプロセスなのです。

私達教師は、「教師とは?」、「学びとは?」、「学習とは?」ということを知り、参加者が望む方向にガイドします。

それが、教師としての役割なのです。

その役割を達成するために、あらゆる知識、経験、情熱を持ち、学習を参加者の望ましい変化のためにデザインしていきます。

教師として、常に学びの姿勢を持ち、柔軟で、人に深い関心を向け人間成長を怠らない人でありたい。

学習は、いつまでも発展していき完成はなく、参加者にとって深い学びの場にデザインされ続けるものでありたい。

そう感じます。

真本英行 (Mamoto Hideyuki)

大学を卒業後、人の学習について研究  
さまざまな分野での適応、応用を研究している。

民間の心理カウンセラー資格の勉強などを経て  
放送大学での心理士資格習得を目指している。